

藝大

3

東京藝術大学のいま、これから。

藝大 第10号

東京藝術大学

東京藝術大学 が 小学館 と

新しいこと を始めます。

平成30 年 10 月 2 日、

藝大アートプラザ[^] オープン。



東京藝術大学 美術学部長
日比野 克彦

東京藝術大学 学長
澤 和樹

小学館代表取締役社長
相賀 昌宏

geidai
art
plaza

東京都台東区上野公園 12-8 東京藝術大学美術学部内 Tel:050-5525-2102 artplaza.geidai.ac.jp

新しくなった
藝大アートプラザも
ピッカピカの
一年生

藝える



「藝える」は「」と読み、植えると同じ意味を持ちます。

今号は藝大の4つのキャンパスで行われている、地域とのつながりを広げ深める活動を特集します。いま本学では多岐にわたる地域連携プロジェクトを行っており、今回紹介するのはその一部にすぎません。外に活動を発信し、地域社会とつながり、共に語り合い、共に創る——芸術の力を社会に浸透させていくことは藝大の使命のひとつです。それを楽しく、おいしく、汗かきながらも爽やかに進めている様子をレポートしました。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01

みんなの芸術

地域に開く藝大の活動

02

取手

アートの力で生まれ変わった
藝大食堂が「あつすぎる」

12

上野

早起きでデビューを応援。
藝大フィルの朝コンサート

18

千住

超地元密着型プロジェクト
8年目の“音まち”

26

横浜

地域に寄り添う
映像研究科の取り組み

28

授業 SANKAN

芸術は実践だ！編

1時間目＝大学院美術研究科工芸専攻陶芸
美術学部工芸科陶芸

2時間目＝音楽学部音楽環境創造科

34

藝える人 カキンダ・パルク・シクストゥ

大学院美術研究科 グローバルアートプラクティス専攻

36

お知らせ

特集

みんなの 芸術

地域に開く藝大の活動

藝大がある取手、上野、千住、横浜では一味違う
食堂やコンサート、アートプロジェクトが展開されています。

地域も学生も磨かれるという、その現場やいかに？



取手

アートの力で生まれ変わった
藝大食堂が「あつすぎる」





この日のメインは蒸し鶏の冷製野菜ソースがけ。猛暑の今年は、さっぱりと食べやすいメニューが人気。野菜は、近隣にある「半農半芸」の畑で育てたものなど、地場産を中心に。



青田が広がる田園地帯を、ちょっと古ぼけた送迎バスがブンブン走っていく。上野からJR常磐線で約40分、千葉県との境を越えた先の、茨城県取手市郊外。まもなくバスは、ひとときわ緑の深い丘へと分け入った。ここは東京藝術大学取手校地。利根川のほとりに広がる広大なキャンパスを訪れた7月半ばは、古きよき時代の夏休み感にあふれた……とい

う前に、暑い！ 暑すぎる！ この日も、バスを降りた途端、アスファルトに溶けて貼りつきそうなほどの酷暑の一日であった。たまらず、バスの停留所にほど近い建物に入る。が、あれ？ ここ、冷房が……。でも、何だか、いい匂いがあるではないか。ガラスの向こうに広がる空間には、いくつもの長テーブルと椅子。由緒正しい、学生食堂の趣だ。

「すみませんね、ここも暑くて……」

申し訳なさそうに迎えてくれたのは、アーティストの岩間賢さん。美術学部絵画科油画専攻の卒業生で、現在は取手市と市民、藝大が芸術による文化的都市づくりを連携して行う「取手アートプロジェクト」……えー、長くなるので後述するとして、ざっくり言うとう、取手に通う学生たちの憩いの場である学食「藝大食堂」の運営を任された人である。

アーティストが食堂？ と首を傾げている間も、昼時は刻々と近づく。「すみません、ちょっと入ってきます」と岩間さんが向かった厨房は、ランチタイムの仕込みの真っ最中。3名のパートタイムスタッフが忙しく立ち働く中で、岩間さんもキャベツを刻み始めた。その手さばきのプロっぽいこと！

「ハハハ、僕、野外演劇とかもやっていたので、炊き出しとか、多かつたんですよ。メニューも、基本は僕が。今は定食とカレーが日替わりで1つずつ。その内容を見て、パスタを4種類くらいのレパートリーから1つ。今日はだいたい60食から80食くらい出る計算です」「藝大食堂」は、まだ生まれだての食堂であ

る。それまで営業していた生協の撤退を受けて昨年にプレオープンし、本格的に開店したのは今年5月。公募により運営母体となったのは、先に述べかけた「取手アートプロジェクト」を担うNPO法人。そのコアプログラムのひとつで、農業や伝統技術に携わる人々とアーティストが協働する「半農半芸」が土台となっている。岩間さんは、その「半農半芸」のディレクターであったことから、「藝大食堂」の立ち上げ役を引き受けたのだ。

つくること、生きることにもっとも親しい営みである「食」を接点に地域とつながる、というコンセプトに基づき、岩間さんらチームは運営の刷新を大学に提案。学生や教員だけでなく学外へ開かれた食堂に生まれ変わった。メニューは地場の食材をメインにし、冷凍品などの既製品は極力使わずサラダのドレッシングまで手づくりするこだわりぶり、本誌編集長の美術学部F教授も「藝大1おいしい食堂」と太鼓判を押す。

「だと思えますよ。超発展途上ですけど(笑)。野菜の一部は『半農半芸』が近くで耕している畑からのもぎたてを使っている、コーヒー

は自家焙煎。学校から許可をもらってイベントなどではビールも出しています」

この日は少し遅れて、ランチタイムが12時にスタート。学生たちに混じって、市民とみられる一般のお客さんたちの姿も、開店直後からちらほら見られる。料金設定は、学生

540円、教職員640円、一般は740円。「一般のお客さまが徐々に増えてきたことで、野菜をふんだんに使えるようになるなど、メニューの内容が充実してきました。食べることで学生の応援をしていただけているというのも、この食堂の特徴のひとつです」



森あり丘あり川辺ありと、とにかく緑豊か。食堂裏手には野生のキジの巣があるらしく、「しょっちゅう走り回ってますよ」と岩間さん。

内装もほぼ手仕事でリニューアル。最近の若い子は食べない、が定説だが、ここには芸術的にご飯を高く盛る（おかわり禁止のため）猛者の常連も多い。懷事情の厳しい学生のためには「芋洗いや米の計量を手伝ってもらい、ランチ券をあげる」などの温情措置も施す。
左上／この日の日替わりカレーはさつまいもやナスなど野菜満載のレッドカレー。

COFFEE

MEXICO産マヒニッフの
フェルトド&オガニック豆使用

店内でスタッフが丁寧に淹れる

TeA

スリランカ産有機栽培紅茶
香り高いアールグレイです

藝大食堂の食材



お米：千葉県市原市の里山より
減農薬栽培

サツマイモ：行方市の信太さんの
畑より



み味噌：新潟県十日町市
松元山より



雪室で熟成された5年みそ

塩：ふくしま公園の伝統天日干し

製法
TAKASUの火田エリ
スリランカ産有機栽培TAKASUの火田エリ

みょうが：キャンパス内で採取 FRESH



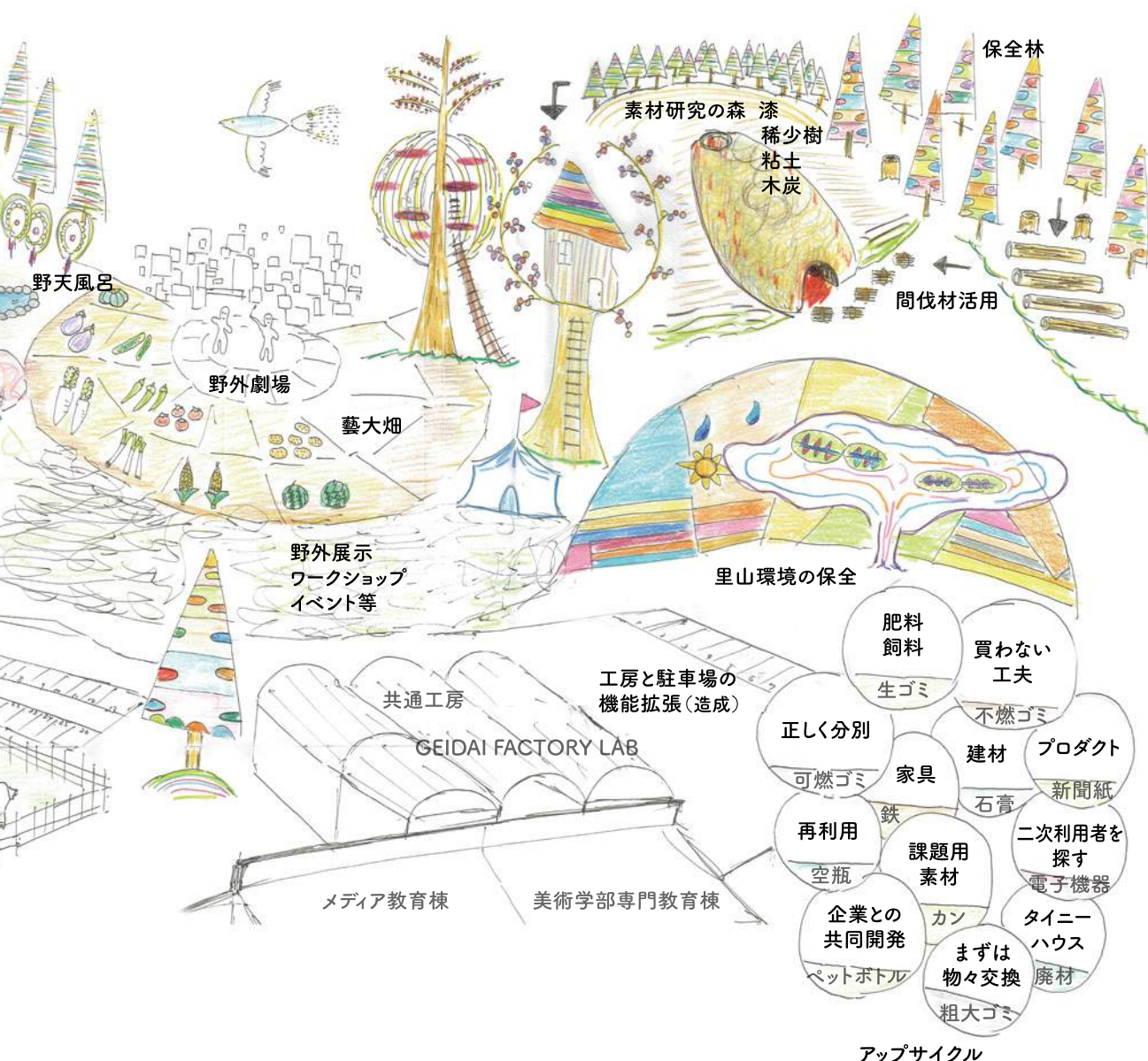


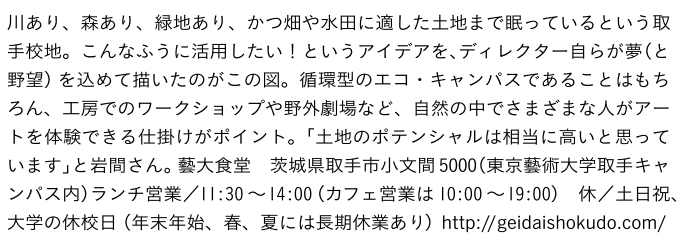
こんなトリデで学びたい!?

夢のキャンパスを描いてみました

上野だけが藝大じゃない!
自然の中で誰もが学べる未来の取手校地は、
きっと、こんなパラダイスに。

構想とイラスト=岩間 賢





藝大で油画を専攻し、大学院で博士号を取得したのち、古民家の再生や棚田でのアートワークショップなど、日本各地の風土や生活文化に根差した独自の作品づくりを行ってきた岩間さん。2006年には中国へ渡り5年間、ランドアートのプロジェクトにも関わった。今も広がり続ける活動フィールドの原点が、学部1年次を過ごした、この取手校地。

「実質、1期生なんですよ。普通にデッサン描いて入学したのに、ここの先生たちが『何で絵なんか描いてるの?』『それでいいの?』って。当時、インスタレーションなどを手がける勢力が出てきて、いわゆる画壇系だったところに新風が吹き始めていたんですね。フィールドワークとかランドスケープとか、自分にとっては衝撃的だったんですが、一方で、実はアトリエで描いているのは性に合わないとか、子どもの頃から泥いじりが好きだったってこともわかってきたりして……。1年生最後の課題では、竹を並べて真ん中に穴を掘って、水琴窟みたいなのを作りました。枕木を立てて、斜面に階段をつくったこともあったなあ。最初の環境が与える影響って、や



厨房に立ち、人を動かし、夢を描く岩間賢さん。
准教授として教鞭をとる愛知県立芸術大学と取
手との間を行き来しつつ、超人的活躍を続ける。

っぱり大きいんですね。上野スタートだった
ら、人生、違ってたかもしれない」

日本と世界を歩いて力を蓄えた岩間さんは、
帰国後、創作的故郷に呼び寄せられるように
「半農半芸」プロジェクトに招かれた。「藝大
食堂」の本格オープンから（この夏時点で）
3カ月、切り盛りに忙殺され気味だと言うが、
取手を愛するOBとして、校地全体に食堂の
コンセプトを行き渡らせる、大きなビジョン

をもっている。それを描いたのが前ページの
図（8〜9ページ）なのだが、各種作物の畑
に果樹栽培、動物の飼育の計画と、野外展示
やワークショップスペースなどを融合させた、
農業と芸術のユートピアが！

「あまり使っていないグラウンドの奥は、すご
く畑にいい土地らしいんです。貸し農園もや
って、余った野菜を食堂に持ってきてもらっ
たりして……。ここでの活動も、自分の作品



づくりみたいなものですね。学生には1年を通じて日本の、農業を基本とした本来の生活リズムを体験してもらいたいと考えています。それを知っておくことって、創作をする上ですごく大事だと思うので。とくに海外に出て行ったときのためにも、ちゃんと体験して理解しておくことが大事じゃないかなあ。自分が何を食べて生きてきたか、それを言えるか言えないか。絵が描けるとかものがつくれる

とかだけじゃ、だめなんですよね」

ともあれ、先立つものはやはり事業としての自立。日々の食堂運営のほか、入試時やイベントなどでのケータリングも開始。そのほか、スタッフとともに、取手内外での新しいアート事業の計画も動き出している。その手腕を評価するのが、美術学部長であり、「取手アートプロジェクト」実行委員長である日比野克彦教授。「フィールドをステージにして作品をつくり、経営的なセンスもある。彼のような人材はなかなかいない」と言う。

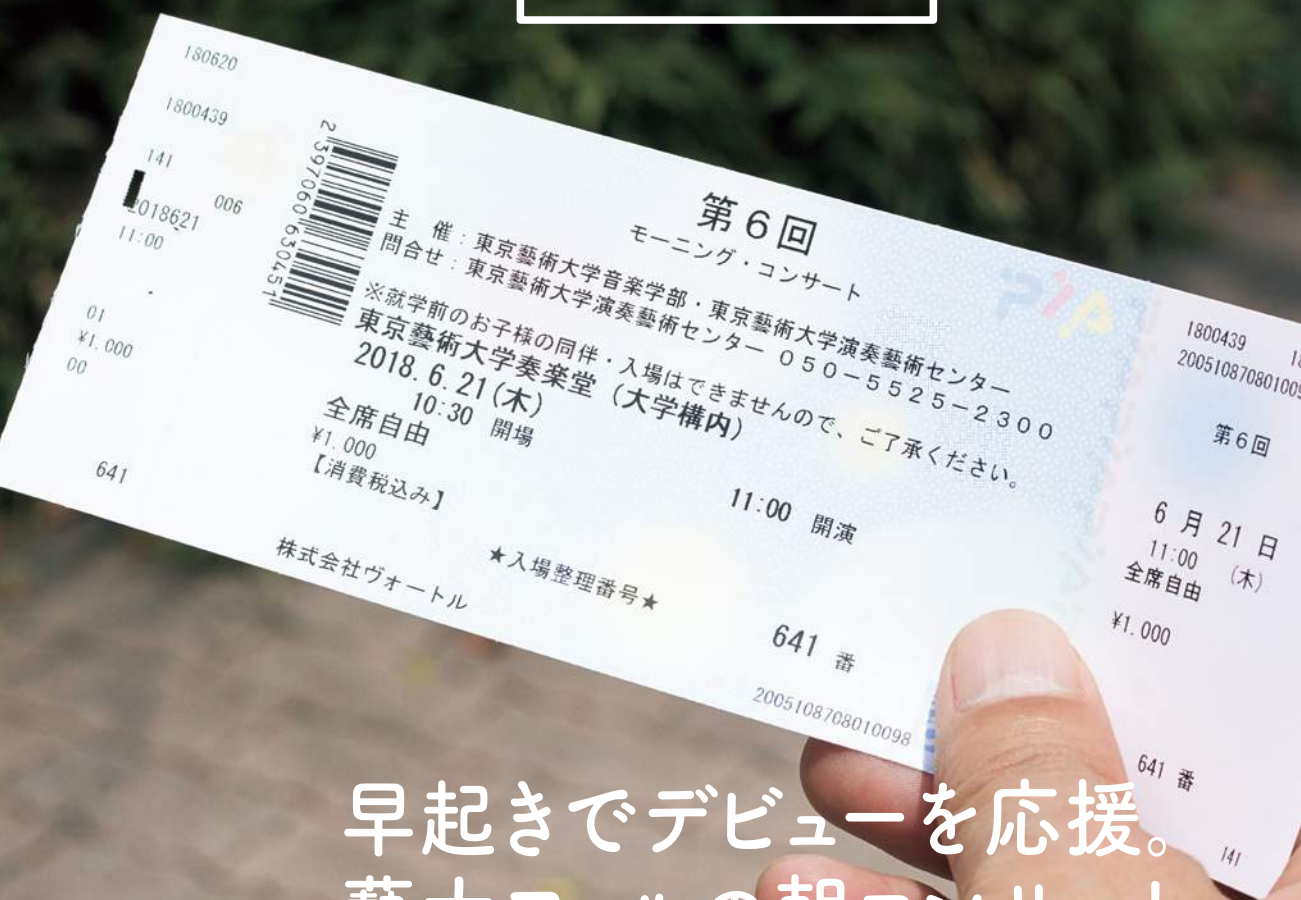
『「藝大食堂」は、今でも十分アクティブ。もちろん、人手がもうちょつとあれば、アイデアは形になるんだけども、大学としてはまずは事業として成り立つようお願いしたい。そして、人を待っているだけでなく、人が自発的に来る仕掛けを設けること。たとえば、これまでは学生の教育の場としてのみ使っていた石や木彫、ガラスなどの工房を、夏休みなどの時期に一般の方に開放したり、あるいはそこで学内の人間が外からの仕事を受注したり……。そういう仕組みと食堂とが連携してやっていくことも考えられる」

こちら、夢は大きい。日比野教授曰く、「人の気持ちをどう受け止めて、それをアートに変換し社会に発信していくか、取手には上野とはまた違った社会的課題がある」とのこと。実際、今年6月からは藝大の事業である、農と芸術をつなぐ一般向けの教育プログラム「半農半芸と食・教育・観光」の開発が、経済産業省の人材育成事業として取手で立ち上がっている。その拠点のひとつが「藝大食堂」になることは間違いないのだから、岩間さんたちの奮闘は、まだまだ続きそうだ。

……それにしても、ひとつだけ、提案したい。人を呼ぶにはやっぱり、(真夏だけとはいえ)ここ、暑すぎませんか？

「ですよ。よく『節電してるんですか?』『ポリシーなんですすよね』って聞かれるんですが、違うんです！ 僕もエアコン大好き！(笑) ただ、施設自体の電気容量の問題で、その工事からやらなきゃいけないらしくて」
熱い思いをひと皿にのせるべく、今日も全力営業中の「藝大食堂」。いつかエアコンが導入されるその日まで、ぜひ読者諸氏にも「食べて応援」をお願いしたいところである。

上野



早起でデビューを応援。
藝大フィルの朝コンサート



奏楽堂、藝大フィルともに旧東京音楽学校時代からの伝統を引き継ぐレジェンド。モーニング・コンサートの入場料は1,000円。前売券(全13回セット・13,000円)は2月発売予定。

上野の朝は早い。多くの人々が、目当てのものを求めて集まり、列をつくるからである。

……と、ここまで読んで、あなたが頭に思い浮かべたものは何だろうか？

1、シャンシャン 2、国宝級美術品
合ってます。合ってますが、

今回だけは違うことにさせていただきます。というのは、あなたが今手にしているのは、ほかでもない東京藝術大学の広報誌。そう。藝大にも、行列のできる場所があるのです。

「今日？ これだよ、これ」

新緑が夏の深い緑に変わりとつある6月某日、朝10時。

第1時限が始まったばかりでまだ学生の姿もまばらな藝大音楽学部の敷地奥にあるホール・奏楽堂の前には、熟年世代の紳士淑女が列をなしていた。差し示されたチケットには

「モーニング・コンサート」とある。その名の通り「朝の」演奏会がまもなく始まるのだ。11時開演で、入場料は10000円。

「もう10年は来てる。いや、無料だった頃からだから、15年以上かな？」

「今は通し券買ってるから、入る順は整理番号順なんだけど、無料の頃は朝早く来て並ぶという席が取れたんだよねあ」



「今日は少なめかな。演目が渋いからね」

おお、鉄板の常連感。解説すると、このコンサートは1971年に始まった音楽学部主催の定期プログラム。藝大の若き音楽家の才能を、大学所属のプロオーケストラ・藝大

フィルハーモニア管弦楽団（以下、藝大フィル）の演奏とともに披露する場として47年もの間、親しまれてきた。年13回開催され、演奏されるのは毎回2曲。作曲、声楽、器楽科から選抜された優秀な学生が登場するのも魅力のひとつで、この日はヴァイオリン専攻4年生がポーランドの作曲家カルウオーヴィチのヴァイオリン協奏曲でソロを務め、作曲科4年生の新作管弦楽作品が初演されるという。

先立つこと数日前、我々は会場の奏楽堂で行われていたリハーサルにお邪魔した。荘厳な空気に満ちたホールの上ステージ上にはオーケストラ団員が居並び、ソリストの登場を待っている。現れたのは、器楽科4年生・山本佳輝さん。ジーンズにポロシャツというラフな服装で、陰陽師が抜けた羽生結弦君、といった感じの柔和な風貌には、高校生のようなあどけなさが残っている。大丈夫なのか（保護者の気持ち）、と思わず抱いた心配は、リハ開始ののち一瞬にして吹き飛んだ。実に堂々とした弾きっぷりではないか！

「本当ですか？ 僕、すごいあがり症なので、今からドキドキなんですけど。32歳で亡くな



った作曲家の作品で、今では演奏の機会がほとんどない曲ですが、とても魅力的な曲なので。指揮者の先生も初めてだということなので、自由にやらせていただいています」

音楽大学出身の両親の下、4歳からヴァイオリンを習い始め、21歳にしてすでに数々のコンクールで受賞。今回、作品が本邦初演される小野田健太さんも、作曲科の俊英である。しかし、なぜ「モーニング」コンサートなのか？ 演奏会といえば夕方か夜に催されるのが通例だが、そこには藝大ならではのこだわり、という理由があるらしいと、藝大フィル事務局長・酒井敦さんは言う。

「私が働き始めた頃、先輩の先生から『平日の午前中に、いつでもどこかでオーケストラが鳴っていること。それが藝大の誇り』だと言われていました。藝大フィルであったり、学生オケであったり、附属高校のそれであったり……。だから、音楽のある朝の時間をお客さまと共有するモーニング・コンサートは、上野にかけがえないものなんです」

しかし、演奏家といえば、アスリート並みに身体調整が必要な職業。通常は夕刻にもつ

てくるピークを午前中に、というのはなかなかの苦勞であるらしく、山本さんも「僕、すごい夜型で……昨日から必死に早起きして、ウォーミングアップしてます」と語っていた。オケの全メンバーにとっても同じであろうが、そんな苦勞は微塵も感じさせない安定の演奏ぶり。しかも、この日を含めてリハーサルは2回。いいですか皆さん、たったの2回合わせ



藝大フィル No.4 の古参・杉原茂範さん。



澤亜樹さん。2016年にコンミス就任。

せただけで、本番当日なんです！

「まあ、それができるのがプロなんですよ（笑）。今回のカルウォーヴィチは、誰も知らなかった曲ですが、それでも2回でやってしまう。基本の能力が、学生とは違うんです」

そう語るのは、コントラバス奏者の杉原茂範さん。藝大フィル所属33年の大ベテランは、自身も在学中、モーニング・コンサートのステージに立っている。同じく、コンサートミストレスを務めるヴァイオリニスト・澤亜樹さんも、選ばれてソロを披露した一人だ。

「リハーサルも本番も、それぞれすごく緊張しました。でも、お客さまが熱心に聴いてくださっていて……。『今年の子はどんな感じなんだろう？』と楽しみにされている様子が、弾いていて伝わってきたのを覚えています」

そして、先輩おふたりが声をそろえるのは、「今の子はレベルが高いよね！」の一言。

「民間のコンクールでもどんな賞を取っているし、ソリストでもある先生方の指導もあって、弦（楽器）もピアノも管楽器もびつくりするくらい上手い。その若い才能が全力投球で挑んでくるわけですから、共演できると

いうことが、私たちにとっても刺激であり、喜びなんですわね」(杉原さん)

加えて、音楽ファンの目も光っている。

「ハルカちゃん(長尾春花。大学院博士課程・ハンガリー国立歌劇場管弦楽団コンミス)やエリちゃん(瀧村依里。読売日本交響楽団第2ヴァイオリン首席)もここで見たよね」

「大好きで、演奏会追っかけてる人もいる」

「発掘? そんな、偉そうなこと言えないよ。」

1000円しか払ってないんだから(笑)。

でも、毎回楽しみだし、応援してますよ」

観客たちの行列が、ゆっくりと前へ動き出した。開場の時刻である。

*

紙幅(と筆力)の関係でざっくりとしかお伝えできませんが、いやあ、素晴らしかった。燕尾服に身を包んだ山本さんは、夭逝した作曲家の幸福感に満ちた旋律を繊細かつ情感豊かに弾きこなし、満場の喝采を浴びた。心臓の鼓動をモチーフにし、多彩な打楽器を駆使した小野田さんの作品《Groovy Heartbeat Ⅲ: Sticks/Stones/Bones》にも、惜しみない拍手が送られた。小6のときストラヴィン



小野田健太さん。留学を目標に励む。



「普段着はユニクロ」の山本佳輝さん。



酒井敦さん。大学では指揮科准教授。

スキーの『春の祭典』をYouTube(!)で聴き作曲に目覚めたという小野田さんは、「作曲家は目指すものに向かってスコアを埋めますが、実際に演奏されたときどう実現されるかを知るのが初演という瞬間。反省点も含め、いろんな発見をさせていただきました」と手応えを語った。

デビューを果たした学生たちの充実の表情。それを支えたオケの成熟の音色。この清々しさは、朝にこそふさわしい。よくぞ「モーニング」にしてくださったことよと感想を述べると、前出の酒井さんは目を細めた。

「これから羽ばたいていく人たちのためのコンサートであるということが、名前から伝わる」といいなと、私自身も思っています」

ホールを出ると、日はこれから天頂に向かう時刻。このコンサートのたびに集まり、旧交を温めているという熟年女性3人は「これからお食事をしながら、感想を話し合ったり、近況を報告したりするのよ」と、肩を並べて門の外へ向かった。芸術の街・上野の一日は、まだ始まったばかり。美しく健やかな音色が、その耳には一日中、響いていることだろう。

千住

超地元密着型プロジェクト 8年目の“音まち”

東京23区の東側、一番北に位置する足立区。その南端に千住の街はある。JR常磐線や東京メトロ千代田線など計5路線が乗り入れる北千住駅を降りれば、小さな酒場がひしめく飲み屋横丁が広がって、夜ごと活気に包まれる。ひとつつ路地を入れば、昭和の時代へと迷い込むような小道が入り組みながらどこまでも続いていくようだ。近年は、住みたい街の穴場ランキングNo.1に選ばれたり、TVや雑誌で特集が組まれたり、この街の名を知る人も格段に増えたことだろう。それでも、千住といえど、治安が悪い、ガラが悪い……

なんてイメージをもつ人も多いはず。だが、ひとたび足を踏み入れば『3年B組金八先生』に登場するような義理人情に遭遇する。誰もが懐かしい気持ちを掻き立てられる街、それが千住だ。

型を破って回路をつくる

この街に音楽環境創造科を擁する千住キャンパスがオープンしたのは2006年のこと（足立区に開設した大学キャンパスの第1号）。そして、足立区や東京都、地域NPOなどととともに主宰する「アートアクセスあだち

音まち千住の縁」（通称…音まち）が今年で8年目を迎える。音まちとは、アートを通じて人と人との縁を見つめ直す市民参加型のアートプロジェクトで、足立区制80周年記念事業をきっかけに11年に初めて開催された。プロデューサーの熊倉純子教授はその経緯について、「どの街にもいえることですが、一人暮らしのお年寄りが増え、核家族化が進み、地域が無縁社会のようになってしまっているのは寂しいことです。そんななか、新たな回路をつくりたいとスタートしました」と話す。

ここで、足立区の職員である舟橋左斗子さ



んの著書『足立区のコト。』（彩流社）より言葉を拝借すると、当初の印象は「昨今流行りの各地の芸術祭、トリエンナーレ、ビエンナーレなどとはまったく比べものにならない低予算で地味に動いているアートプロジェクト」だったというのが興味深い。それが8年も続いているのは異例のことで、まちなかアートプロジェクトの成功例といえるだろう。参加アーティストの作品は、千住という

独特の街を色濃く映したユニークなものばかり。継続的に同じ作家が関わり続けていることも特徴の一つだ。例えば、音楽家の野村誠さんが主導する『千住だじやれ音楽祭』は、

その名の通り参加者とともにだじやれを飛ばし合いながら音を生むのだが、銭湯で「風呂フェッショナルなコンサート」を開催したり、千住に1010人(一)を集めて大演奏会を開いたり、奇想天外な企画を繰り広げてきた。「今では街の人たちが有志で『だじやれ音楽

研究会』を結成しているんです。小学生から80代の方まで幅広い年齢層の皆さんとの関わりを通じて、人と接するとはどういうことなのかと勉強させてもらっています」と話すのは、だじやれ音楽祭の運営を担う、博士後期



千住宿の面影を残す宿場町通りから一本入る、とある路地。ヒントは「麵屋 音」の脇。千住の素顔がここに。

課程1年の石橋鼓太郎さん。同じく運営メンバーである修士課程2年の山下直弥さん曰く、「楽譜のない演奏の面白さに驚きました！その場で生まれたアイデアを野村さんとともに紡ぎ、新しい音楽が生まれていく。活動を通して今までの音楽の概念が吹っ飛びました」

俺たちの『メモリバ』

音まちの目玉ともいえるのが、街のさまざまな場所で毎年開かれてきた『Memorial Rebirth 千住』（通称…メモリバ）だ。無数のシャボン玉が光となって空に舞い、「しゃボンおどり」に人が舞う。夜には、打って変わって幻想的な世界へと観客を誘う。現在、メモリバは千住に移設してきた東京電機大学とタッグを組み、子どもからお年寄りまでが心待ちにする恒例イベントとなった。プロジェクトを手がけるアーティストで、彫刻科とグローバルアートプラクティス専攻で教鞭を執る大巻伸嗣教授にとっても、千住はとりわけ思い入れのある街だ。「不思議なめぐり合わせでこの地にアトリエを構え、2007年から5年ほどを過ごしました。一言で言えば、千住は歴史がある、人の良い街。僕みたいな新参者を受け入れてくれる懐の深さを感じます。一風変わった人もたくさんいますけど（笑）。だが最初は、アートプロジェクトが単なるイベントになってしまうのでは、と懸念をもっていたのだそう。「それでも音まち



「仲町の家」にて。左上より時計回りに、伊原千恵子さん、山本良子さん、学生の藤枝怜さん、音まちディレクター吉田武司さん、NPO 法人音まち計画理事の吉川和宏さん、学生の山下直弥さん、音まちプロデューサー熊倉純子教授、安喰悦久さん。



上／「しゃボンおどり」の様子。大巻伸嗣教授(写真中央)が手がける『Memorial Rebirth 千住』のオリジナル盆踊りだ(2016年)。下／夜の『Memorial Rebirth 千住』は、昼の顔とはまた異なり、幻想的な光景へと様変わりする(2017年)。写真＝高田洋三(上)、富田了平(下)



が実現したのは、やはり区に熱心な職員さんがいたこと。与えられるものではなく、自ら動きたいと思う人が集まらなければ実現しないことです。ただ、急速に街が変化している今だからこそ、古いものと新しいものがあり方を見つめ直さなくては。時間や場所、歴史を通して物事を考えないと、これまでにあった良い記憶があつという間に消えてしまいうから。街の人たちの顔を思い浮かべながら、どうすればアートになり得るのかと悩みました。メモリバは僕にとつても実験ですが、アートというよくわからないものが社会とつながる道具になるのは面白い。さまざまな人が異なる視点をもちながら関わることができるプロジェクトのサンプルになっていると感じます。何より、継続的にやることに意味がある。親から子へと紡いでいくためには30年続けるのが目標です。そこからが本当のスタートかもしれません。この先、街や人そのものが作品となっていくんじゃないでしょうか」

そう、メモリバをはじめとする各プロジェクトを支えているのは、街の人々である。その一人、吉川和宏さんは足立区青少年委員の

一員で営業マン。メモリバの「裏の顔」とも言うべき存在だ。若い頃は暴走族の副総長としてチームを率いたという過去をもち、「悪いことは全部やった」と言つてのける彼だが、体調を崩し心機一転。奥さんの妊娠がわかったとき、「どうか健康で生まれてほしい、それだけで幸せだ」と強く思ったのだそう。その後は、PTAの会長を務めたり、父親たちでソフトボールのチームを結成したりと、子どもに関わる活動を精力的に続けてきた。「メモリバの話を聞いたとき、たくさんさんのシャボン玉がふわーっと空に浮かぶのを想像して、これは子どもたちに見せたいーと、二つ返事で引き受けた。それが運のつきだね（笑）。1回目はとにかく人手が足りなくて、町内の父親たちを集めて警備の手伝いを頼んだり大変だったな。でも、回を重ねるごとに関わる人同士の絆も生まれてきてさ。シャボン玉を見ていたら、子どもの頃を思い出したりして、まさにメモリアル・リバースだよね」

自営業を営みながら男手一つで中学生の息子を育てる安喰悦久さん（あぐい えきく）も心強い助っ人だ。「実際にメモリバを見て、こんなにいいもの



右上／大巻伸嗣教授が空き家を神秘的な空間へと生まれ変わらせた《くろい家》(2016年)。右下／「イミグレーション・ミュージアム・東京」のイベント時の風景 (2016年)。左上／魚市場を舞台に開かれた『千住だじゃれ音楽祭 千住の1010人』の様子 (2014年)。左下／千住の街の音や人々の語りなどを音楽として編集・発信するアサダワタルさんの『千住タウンレーベル 聴きめぐり千住！』の一幕 (2018年)。





だ
北千両



野村誠さん率いる『千住だじゃれ音楽祭』にて制作された、ユーモラスなだじゃれ絵が入った現代版、地口行灯。大衆居酒屋「北千両」の軒下に設置されている。

すなつく
ひ
メ

SAPPORO
★サッポロビール★

なんだって感動しちゃったんだよね。スミコ（熊倉教授が、開催3年目くらいのに『大変だから今年で終わりにしようかな』とか言うもんだから、俺が『コラッ、千住のお祭りにするんだ！』って、酔った勢いでメモリバの代表になっちゃった（笑）。

主催者側からの一方通行じゃなくて、こちらの意見も取り入れてもらっているし、いい関係が築けていると思うよ。

『大巻さんがアートをつくって、俺たちが人の輪をつくる』。それが合言葉だね

音まちディレクターの吉田武司さんは、こう話す。「音まちの名前を知らなくても、

『あのダジャレの人たちね』

『シャボン玉のお祭りね』と、プロジェクトごとの印象で人々の記憶に残っているようです。街を歩いていると、協力してくださっている方々に遭遇することはもちろん、『おうっ！』と声をかけてもらえるようになったのはうれしいこと。街の人たちに刺激を受け、

学生たちにもいい経験ですね」。音まちなつくる人の輪が着実に、そして確実に広がっているのだらう。

在留外国人をテーマにした「イミグレーション・ミュージアム・東京」に大学院生の頃



より携わり、現在は音まちな事務局員の森本菜穂さんの言葉も象徴的だ。「フィリピンの文化をパーティ形式で体験してもらうイベントを終えて、フィリピン人の参加者の一人が『We are proud of us』と言ってくれたことに感激しました。アートの力ってすごい！」

新たな交流の場「仲町の家」

最後になったが、今年の音まちでは新たなプロジェクトも始動した。千住仲町エリアにある「仲町の家」だ。2016年より、戦前に造られた日本家屋と緑あふれる庭が情緒を醸すこの空間を地元のオーナーから借り受け、展示や映画上映など、音まちな活動拠点としていたが、18年6月より休日を中心に一般へ開いている。さまざまな催しにも注目だが、居合わせた人たちと会話を楽しんだり、のんびりと過ごすだけでもいい。ここに来れば、つかの間、千住の住民になったような気分がきつと味わえることだらう。音まちな参加していた息子さんを通じて、週に数度、仲町の家の手伝いをしている伊原千恵子さんがお茶を出しながら、「何十年も同じ空気だった千住の街が、藝大をはじめいろいろな大学ができたことでこんなに変化があるんだと驚いているんです。すごい力を感じるわ。千住は私の生まれ育った街ですから、ここではそのお話をしたり、お客さんとの交流を楽しんでいますよ」と、話をしてくれた。

*11月18日にメモリアルリバス千住、2月16日にイミグレーション・ミュージアム・東京のイベントを開催するほか、2019年3月4日まで仲町の家で遠藤幹大と三上亮のインスタレーションを展開。詳細：<http://aaa-senju.com/>

横浜

地域に寄り添う 映像研究科の取り組み

歴史的建造物を文化芸術に活用するプロジ
エクトや『横浜トリエンナーレ』の開催など、
アートとの関わりが深い街として知られる横
浜市。2005年、藝大の大学院映像研究
科が新設される際にこの街から誘致を受けた
のも、「文化芸術創造都市」を標語に、特に
映像を通して文化を発展させたいという横浜
市の強い思いがあつたからだ。そんなわ
けで映像研究科は大きな期待を背負っている
のだが、年間を通じて地域に開かれたさまざ
まなプロジェクトを展開し、大いに寄与して
いるといえそう。

あり、ミニシアターさながらである。そこで
去る7月に開かれた公開講座「コンテンポラ
リーアニメーション入門」に潜入した。満席
の客席には、若者から年配まで幅広い層の参
加者が。フォントヴロー修道院文化センター
所長などを歴任し、セザール賞審査委員など
を務めるグザヴィエ・カワートポールさんを
講師に、短編アニメーションを6作品ほど鑑
賞しながら進行。質疑応答では「コンテンポ
ラリーアニメーションってよくわからない
……」という声に企画・進行を務める山村浩
二教授が作品の見どころを丁寧伝えていた
のが印象的だ。映像研究科長の桐山孝司教授
は、「映像の知識がなくとも、親しみをもち

やすいアニメーションをきっかけに、多くの
方々に映像に興味をもってもらえたら」と話
す。思えば、一般的に、短編アニメーション
に触れる機会はそうない。学内だけで完結す
るのではなく、このように街へ、社会へ開く
ことで、ゆくゆくは日本の文化や日本人の意
識に変化を与えることになるかもしれない。
他にも、修了制作作品の上映や、学生らが
制作した短編映像をプロジェクトマップピ
ングで見せる『馬車道プロジェクト』な
ど、イベントは目白押しだ。また、小中高生
を対象にした「スクール・シアター」の魅力
は、なんと言っても教員陣の顔ぶれだろう。
放送20年を超える『ニヤッキ!』を手がける





伊藤有彦教授、『ピタゴラスイッチ』の監修者である佐藤雅彦教授、北野武映画の撮影監督を担当してきた柳島克己名誉教授をはじめとする「面白い先生」の授業は、子どもたちにとって刺激的に違いない。

「地域に開く」とは何か。今後も新たな可能性が横浜から生まれていくことだろう。

上／昨年の『馬車道プロジェクション』。今年は10月31日～11月2日に開催予定。
 下／7月に行われた『OPEN STUDIO』では修了制作の過程を公開。観客の感想を参考にすることも。池田愛《文字文字する三部作》(右)、築地のはら《ねずみの部屋》(左)

1 時間目

「窯より始めよ」

大学院美術研究科工芸専攻陶芸
美術学部工芸科陶芸

突然ですが皆さん、芸術作品って、どうやってこの世に誕生すると思われます？

「やっぱり、あれでしょ？ 雷みたいになズガーンと『降りてきた！』とかいうやつで……」

これだから素人は困りますね。ええ、かくいう私もそうでした。でもね、きつと違うんです。雷に打たれようが神が降臨しようが、思いついただけでは作品は生まれない。どうすれば、って？ 手ですよ、手。その手を、体を動かすんです！

ということ、今回はまず、ザ・力仕事の現場にお邪魔する取材チーム。取手校地のオアシス「藝大食堂」(2~11ページ参照)から、奥地へ踏み入ることおよそ5分。丘の中腹で、何やら遺跡の発掘を行っているよ

築窯

性格俳優の近藤芳正似の三上先生。親方ふうだが、発言の随所にロマンチストの片鱗が。

授業 SANKAN

芸術は
実践だ！ 編

美しい作品も妙なる調べも、1のひらめきと99の努力から生まれるもの。藝大授業体験ルポ、今回は「肉体派」です。

挿絵=小柳景義 文=大谷道子

うな一団が目には留まる。近づく、それは発掘ではなく、建築作業であつた。大学院で陶芸を学ぶ学生による築窯実習。窯、ですよ。陶器、やきものを焼く窯をつくっている真つ最中。

「穴窯といひます。窯の中でも、最初に近い形のもの。たぶん窯の最初は、粘土質の土地に穴を掘っただけのものだったんじゃないかな。で、焼くと固まって、それが窯になったと……。これは少し地面を掘って、上に竹を組んでアーチをつくって、上に麻布を敷いて、周りにレンガを積んでいくところ。あとは、上に土を被せていきます」

三上亮准教授の解説に頷いていると、ドン！ と背後で地響きが。何事？ 振り向くと、丸太に把手を取り付けたようなものを、学生が地面に叩きつけている。時代劇の城づくりのシーンなどでも見かけるこの道具は「たこ(タンパー)」。

古い窯を壊したあとの塊(当然、やきもの)をこれで砕き、新しい窯に再利用するのだという。



築窯の授業がここ取手校地で始まったのは、おそらく2000年頃。以降、毎年5月あたりから、大学院1年生たちが、つくりたい作品に適した窯（やきものによって適性があるのだ）を選定し、自分たちで設計図を引いて基礎から建てる。電気やプロパンガスで焚く窯が主流になりつつある今、肉体労働を厭わずに原始的工法を実践するのは、もちろん理由があつてのこと。

「薪だけで焼成する窯ですから、湿気や風向きも含めて風土の影響を受けます。でも、そこそが陶芸。その土地の土や空気を使って焼くわけだから、どこでも同じものができるわけではない。そういうことを、体験を通して学べたらいいんじゃないかと思っています」（三上先生）

そして、ここへ来て気付いたのだが、先生と助手の方以外は、もしかして女子しかない？

「そうですね。陶芸科は最近、女子が多い。昔は窯焚きは女人禁制なんて言われてたけど、今は逆転しました」と三上先生。そう言われれば、というのも何だが、この窯、流線型というかアーモンド型というか、フォルムがシュッとされていて、実に優美で美しいのである。

「美しいのは大事。作品と窯は一致するんですよ。だから、思う存分、美しい



取材時点で8割方出来上がっていた2018年度の穴窯。先輩たちの知恵と経験も生きている。

陶芸 窯場



上條恒彦氏の豊福先生は、やはり
美声。色絵磁器の作家でもある。

窯をつくつたらいい。そういう攻め方があってもいいと、僕は思いますね」

左官仕事はもちろん初めて。でも今は、1個3キロもある耐火レンガを軽々と持ち上げ、冷えピタ、タオル鉢巻きで作業に勤しむ。美しい窯は乾燥を経て、9月に火入れが行われる。

*

数日後、所変わって上野の陶芸研究室も、慌ただしい一日を迎えていた。たくさん陶器を載せた長い板を持った学生が目の前を行き交うこの日は、前期授業のクライマックス。学部生から大学院生、研究生まで、ここで学ぶすべての学生が作品の「窯入れ」を行う日なのである。

上野校舎の中にある窯は、もちろん取手のそれとは違って至極近代的だ。この日は、教室でもっとも大きなプロパンガスの窯が稼働。巨大なコンクリートの箱の中、レンガが敷き詰められたカプセルホテルサイズの空間に、大きさ、形状ともにさまざまな作品が次々と取められていく。「専攻

に入ると、まず湯呑みを300個つくって轆轤の基礎を学びます。その後、壺や大皿をやって、3年生までで轆轤と型物（型でつくる陶器）をやって、4年からは卒業制作。手びねりでオブジェをやったり、個性が表れますよ」

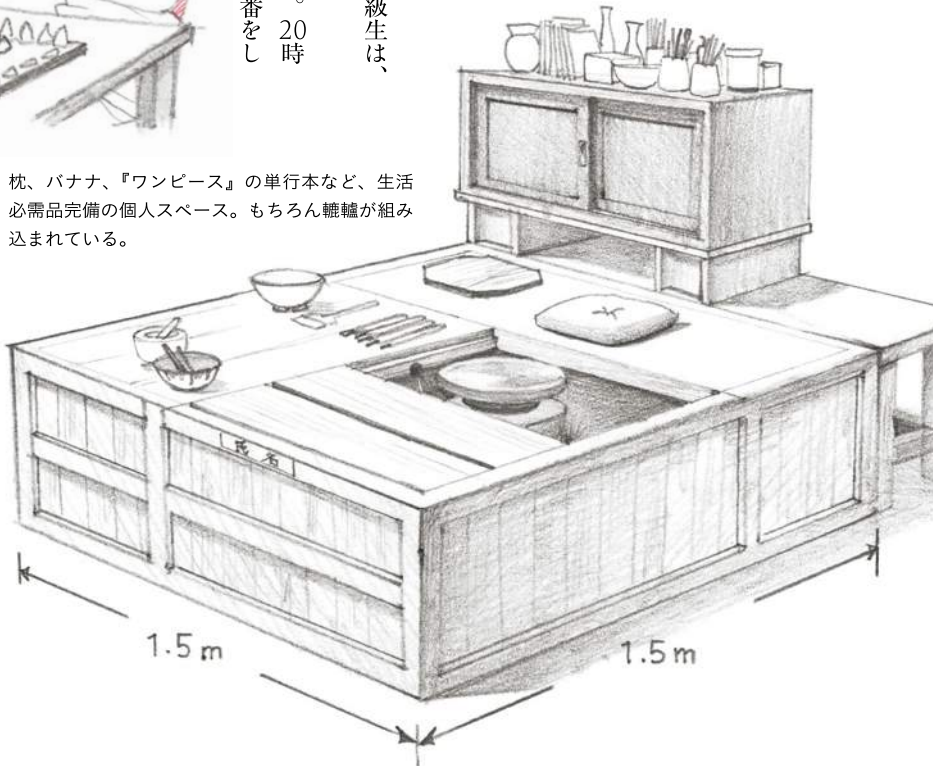
説明してくださったのは、教授の豊福誠先生。その監督の下、窯の奥で実際の指揮を執るのは「窯長」と呼ばれる責任者の学生だ。修士2年か博士課程の学生が任にあたり、学部2年、3年といった下級生は、その指示の下で働き、仕事を覚える。

「木曜金曜が窯焚きになるのが通例ですね。20時間ちょっとかけて焼くので、今夜は徹夜で番をします。夕食はあそこの台所でつくって、皆で食べる。器はほら、いくらでもありますから」

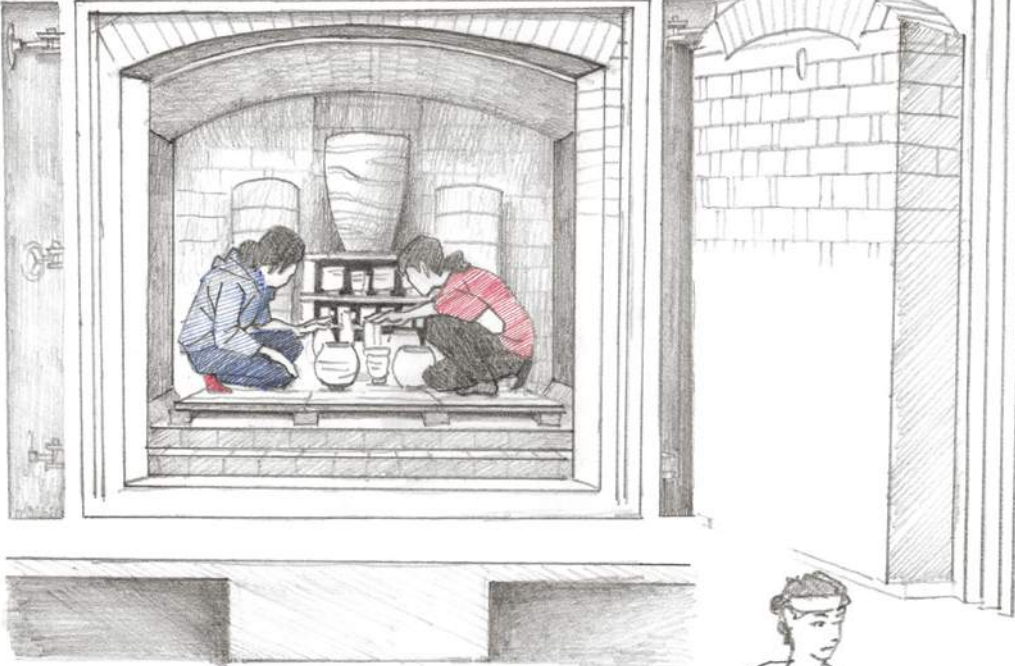
学内にしては立派な台所は、豊福先生もかつて師事した「食いしん坊の教授」の置き土産。台所だけでなく



枕、バナナ、『ワンピース』の単行本など、生活必需品完備の個人スペース。もちろん轆轤が組み込まれている。



く、工房スペースには、時代劇のセットのような木造の小上がりがありあちこちにあるのだが、1ブースが学生個々の作業場だという。藝大広しといえども、生活感にかけては学内一のこの教室。そもそも、陶芸といえば、師匠の下



に弟子入りし、寝食をともにして身につける技芸というイメージが強いが、ここは何といつてもアカデミー。粘土の扱い方から轆轤の使い方、釉薬



の調合、焼き方、仕上げ方に至るまで、技術と知識を惜しみなく教え共有し合う、フラットな場だ。

「かつては、教授が右と言えば皆が右を向く、みたいな時代もありましたけど、今は言っても誰も向いてくれないだろうなあ（笑）。藝大の授業で大事なものは、学生の自主性。もちろん、課題は最低限きちんとこなしてもらいますが、『こうやらなきゃ正解じゃない』とは言いません。むしろ、とらわれる必要はない。教わった技術を応用して、自分の世界を広げていってほしいんです」

言われたことしかできない人ではなく、自ら動く人に、と豊福先生。一生をかけての陶芸道、その入り口で築窯を経験することは、実感と自信を体得する、何よりの機会に違いない。

2 時間目 「いい音って？」 音楽学部音楽環境創造科

さて、アーティストが珠玉の芸術を生み出したとして、それが作品として認められるのは、広く大衆に届いてこそのこと。音楽分野の場合、生演奏やパフォーマンスを別にすれば、音源や映像がよい形で記録・保存されることが極めて重要だ。

このプロセスを担う、いわば陰の創造者ともいえる技術者を育てるための授業も、藝大には存在する。音楽環境創造科は、身体表現や言語、メディアなど多彩な音楽芸術を志す人材育成を目指して2002年に新設された学科。その専門領域のひとつである「録音技術」を学ぶ「プロジェクト音響」では、スタジオでの録音実習を通して実践的に学ぶ授業を行う。器楽科など他科からも聴講生がやってくる、グローバルな教室である。

「自分で作曲をしている学生などが、音づくりの基本的な技術を身につけておきたいと学びに来る場合もありますね」と話すのは、亀川徹教授。NHKで長く音楽番組制作に携わり、ハイビジョン放送に対応する録音技術などを研究してきた音響分野の日本のトップランナーである。訪れた当日は、前期授業の総仕上げの日。プロの演奏家

2名を招いてスタジオで演奏を行ってもらい、学生たちが録音するのだ。

天井の高いスタジオにセットされつつある、いくつものマイク。聞けば、学年ごとに課題があり、1年生はスタンダードな2チャンネルのステレオ録音を、2年生以上は2つのチームに分かれ、サラウンドと呼ばれる5・1チャンネル、それに高所のマイクを加えた9チャンネルという収録方法を試みるという。素人にはまったく何

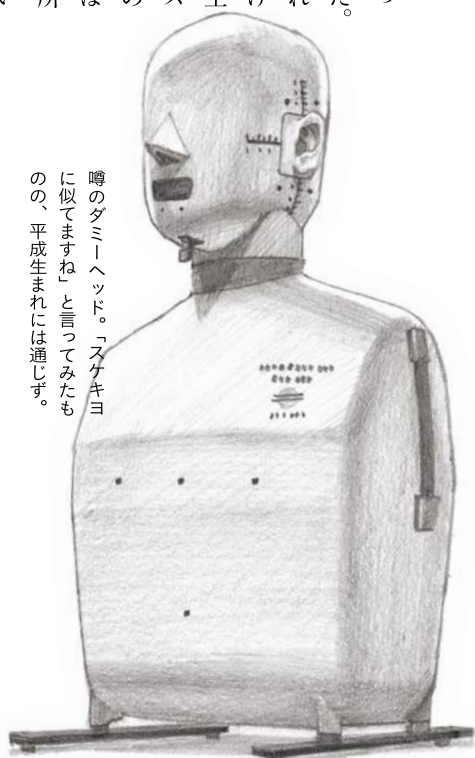
のことやら、だが、事前に検討された設計図をもとに、全員がキビキビと手を動かしている。

「基本的には、マイクを置いて録ろうと思う音を録る。当然、マイク位置によって録れる音が変わりますから、どう動かすどんな音になるのか、やりながら確かめるんです」(亀川先生)

ふむふむ、と話を聞きながらスタジオを眺め渡すと、中央に何やら不思議な物体が置かれている。薄緑色のトルソーというか、小型モヤイ像というか……見ると、ちゃんと耳や口がついていて、耳たぶを触ると、本物のようにプニプニだ。

「『ダミーヘッド』という、人体を模った録音機器です。人間の耳は複雑な構造をしているので、

噂のダミーヘッド。「スゲキヨに似てますね」と言ってみたものの、平成生まれには通じず。



それを通すと音がどう聞こえるかをこれで確かめるんですが、けっこう高額で、耳たぶは片方で6万円するんですよ。学生には、『触ると1回3000円だからね』と言っています(笑)

すみません、あとで払います(編集部が)。そうこうしているうちに、演奏家が到着。今日はヴァイオリンと箏で宮城道雄の『春の海』を合奏するというが、形状も音の出方も異なる楽器ゆえ、それぞれの特性を考え抜いてのマイク配置になっているはずだ。

「OKですか? じゃ、始めよう」

亀川先生の合図で、演奏者を残し、学生たちは調整室に引き上げる。「卓」

録音調整室



と呼ばれるミキシング・コンソール(レバーや計器で埋め尽くされたテーブル)の前に陣取ると、スタジオにキューを発し、まずはテイク1。奏でられる一音一音を耳を澄ます。

録音が終了すると、演奏家とともに音をチェックする。最初は1年生のマイク、次に5・1チャンネル、9チャンネル。

「ヴァイオリンに比べて、箏が柔らかいね」そう? 私はヴァイオリンのほうが柔らかく感



じた」「ヴェールがかかっているみたいだから、もう少しクリアにしたい」「響きを残しつつ、芯が欲しいっていうのかな」。演奏家の発する一言一言に、学生一同、むむむむ……と考え込む。流れてきた音を流れたままに正確に録ればいいかという、そういう単純なものではない。演奏家と技術者の、音を挟んでの生々しいやり取りを経験するのが授業の主眼だと、亀川先生は言う。

「マイクを立てて録音すること自体は、1年くらいで習得できるようになりますが、自分がつくりたい音がどういう音なのかを、学生はまだわかっていないと思うんです。だから、演奏家とコミュニケーションをとる中でそれを考えてもらうのが、実習の目的。演奏家たちは自分の音をもっているから、録音する側は、それ以上に勉強してディスカッションができてはいけません」

演奏家からのフィードバックをもとに、それぞれマイク位置を修正し、いざテイク2。テイク3を重ねる頃には、素人耳にも、これが音の洗練かしらという工夫の跡が感じられるようになった。が、演奏家たちからは「変に響きが足されるくらいなら、いっそ丸裸のままのほうがいい」と鋭い指摘が。感覚と感覚のせめぎ合いはシビアだが、

演奏を作品に仕上げていく上では、どうしても避けては通れないプロセスだ。「音を出すのは演奏者ですが、その演奏をどうやってより良い音に仕上げるか……。録音する側は、感性に頼りすぎてはいけないけど、『これが自分の思う音だ』という方針も、ある程度はもたなくてはならない。難しいですよ。でも、だから面白いともいえる。僕の音づくりの方法論は、たくさんあるやり方のひと



つ。学生には、自分なりのセオリーやロジックを見いだしてほしいんです」(亀川先生)

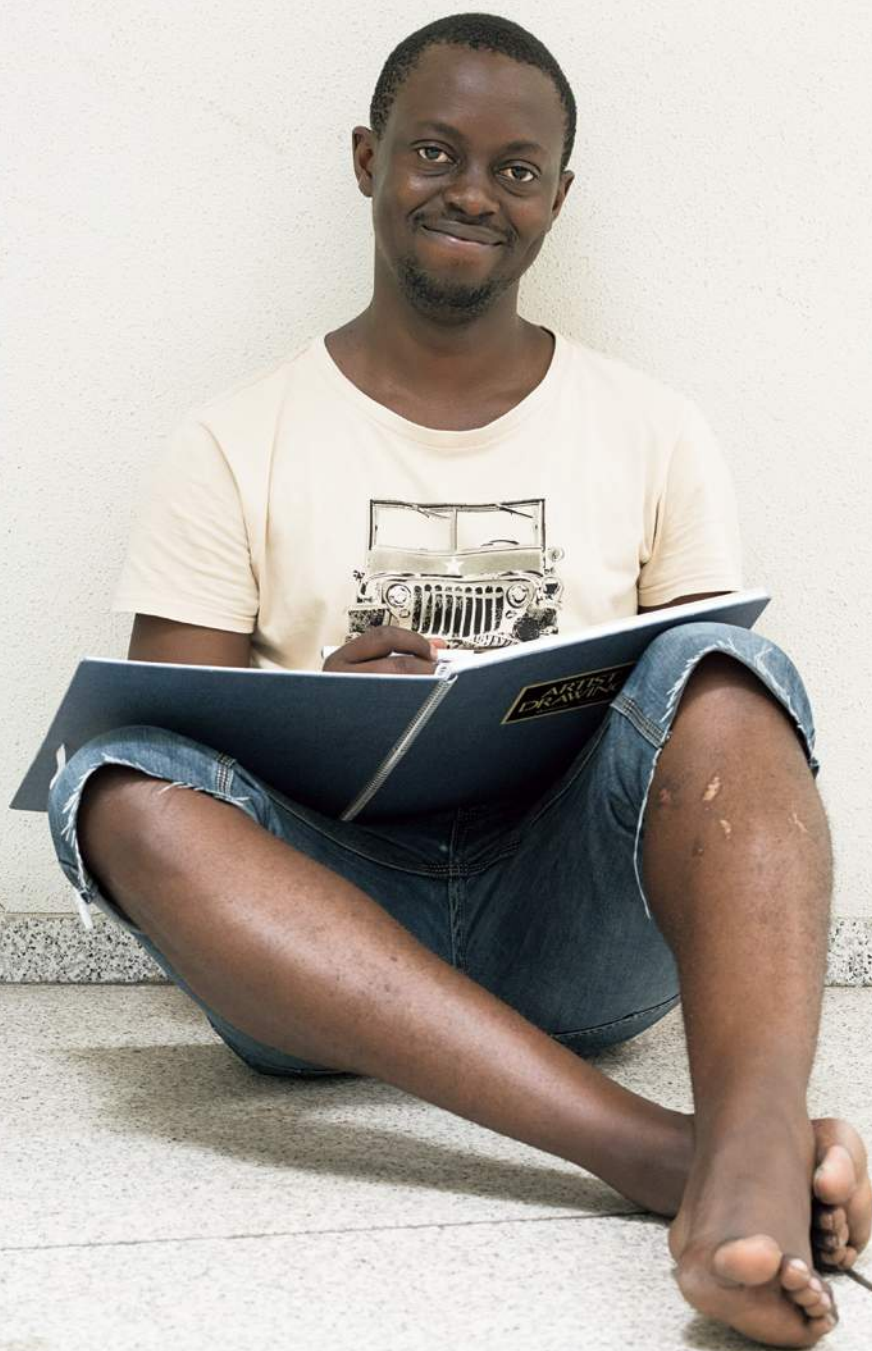
4K、8Kなど映像のハイビジョン化が進む中、録音技術も日進月歩で進化している現在。その技術を追いかけて、コンピューターによる音響制作や、アニメーションほか各種メディアのためのサウンドデザインなど、求められるクリエイティブは多彩さを増している。しかし、どんな場合でも、自分の中にいい音の基準と、それをつくるための自分なりのやり方を備えておくことは必須条件。手と体を動かし、耳と感性を鍛える。録音もまた、実に身体的な創造の場なのだった。



亀川先生。一流の演奏家たちと対等に対話するため、さまざまな演奏会に足を運んで耳を肥やした。

カキンダ・パルク・シクストウ

大学院美術研究科
グローバルアートプラクティス専攻





毛利悠子講師とパリ国立高等美術学校のエマニュエル・ユイン教授による共同授業にて。

コンゴ民主共和国でマンガ家として活躍するカキンダさん（34歳）が、「マンガの枠を超えたい」と、このMANGA大国へはるばるやってきた。その思いとは？

めざめ：マンガが教えてくれたこと

「家族の影響もあって幼い頃から大好きだったマンガが、読むこと・描くことを僕に教えてくれました。そのストーリーを通して、身の回りで起きたことを表現できるのが楽しいですね」と言う彼は、常にスケッチブックと一緒に。電車の中、旅先、カフェ……どこにいても気になる風景や人々を描き留めることが



JRの駅構内でのスケッチ。英語、仏語、日本語によるオノマトペも描かれる。

まよい…スケッチの技術とは

どこでもスケッチを始めてしまうカキンダさん。例えば電車で人を観察して描いていると、怪訝な顔を向けられることもあるらしい。

「ジロジロ見られて描かれたらいやな気分になる人もいますよね。でももしかしたら、それは僕が発するバリアみたいなものに違和感を感じているのかも。スケッチの技術が足りていないということですね(笑)」

ゆめ…世界の言葉でマンガを

転機となったのは、昨年のこと。グローバルアートプラクティス（GAP）の学生として、ずっと訪れてみたかった日本に国費で留学することがあった。ここでは、東京藝術大学とパリ国立高等美術学校の共同プロジェクトであるパフォーマンスの授業に参加するなど、初めての経験ばかり。「パフォーマンスと描くことに共通点を見つけたのは大きな発見でした。今後ともさまざまなアートの実践を通して、マンガの枠を広げていきたいです」

「アートとは何かを言葉にするのはすごくむずかしいけれど、個人の内側から出てくるものだと思います。それは、自分を含めた人の声に耳を傾けることで生まれてくるのではないのでしょうか。だから、誰もがアートを作れると信じています。そう、僕にとっては、日々描くことが大事。今日は気力がないと思う日もあるけれど、やっぱりペンを握ってしまうから」。夢は、世界中の言語で、自身のマンガ本を発行することだ。

*『どちらを選んだのか〜』上映会は奏楽堂にて
10月12日18時開場・18時半開演 ※事前予約制
申込み URL = bit.ly/dochirawo
問合せ TEL = 045-650-6200 (映像研究科)

お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

映像研究科ゆかりの2作品が カンヌ国際映画祭でノミネート



©2018 映画『寝ても覚めても』製作委員会 / COMME DES CINÉMAS



©2018 映画『どちらを選んだのかはわからないが、どちらかを選んだことははっきりしている』製作委員会

2018年5月に開催された第71回カンヌ国際映画祭に、東京藝術大学大学院映像研究科の映画専攻を修了した濱口竜介監督らによる映画『寝ても覚めても』と、メディア映像専攻の佐藤雅彦教授らによる短編映画『どちらを選んだのかはわからないが、どちらかを選んだことははっきりしている』がノミネート(正式出品)されました。

コンペティション部門に出品された前者は、芥川賞作家・柴崎友香の恋愛小説を、猫や震災など映画独自の要素を盛り込み、主演・東出昌大、ヒロイン・唐田えりかで映画化した、濱口監督の商業映

画デビュー作。同じく映画専攻を修了した田中幸子(脚本)、佐々木靖之(撮影)、山崎梓(編集)らとともに「現場で起きたことをある種のドキュメンタリーのように撮る」というスタイルで製作。9月1日から全国公開中です。

短編コンペティション部門へ出品された後者は、佐藤教授が佐藤研修了生による映画製作チームC-project(関友太郎、豊田真之、平瀬謙太郎)と映画プロデューサー・川村元氣と共同で監督した作品。「手法がテーマ性を担う」という考え方に基ついた実験的な企画を黒木華、柳楽優弥らの演技によって物語性を持った短編映画として完成させました。10月12日には佐藤教授とC-projectが以前製作した『八芳園』(2014年カンヌに出品)、『父帰る』とあわせての上映会(※)を開催予定です。受賞こそ逃したものの、映画界に新風を吹き込んだ両作をお見逃しなく。

旧博物館動物園駅が公開 扉に日比野克彦教授のレリーフ



日比野教授による出入り口扉のレリーフのデザイン

上野駅から藝大に向かう途中、旧奏楽堂の向かいにある京成線・旧博物館動物園駅の駅舎の一部が改修工事を経て11月上旬に公開されます。新設される出入り口扉には、美術学部長の日比野克彦教授による上野エリアの9つの文化・芸術施設をモチーフにしたレリーフがはめ込まれ、駅舎内では京成電鉄と東京藝術大学が協働し、歴史的建築物の魅力を伝える展示などを行う予定です。

博物館動物園駅は1933年に開業。御料地であったため、駅舎は昭和天皇の勅裁を受けて建設されました。以後、藝大や東京帝室博物館(現・東京国立博物館)や恩賜上野動物園の最寄り駅として利用されてきましたが、利用者の減少により97年に営業休止、

2004年に廃止。現在京成線の列車が通過する西洋風の駅舎は東京都選定歴史的建造物とされています。



改修後の旧博物館動物園駅イメージ



裏表紙の広告の写真の撮影風景。写真撮影は篠山紀信、動画撮影は新津保建秀、アートディレクションは箭内道彦

ノウハウを連携させたプロジェクトも構想中。予想もしないことがここで生まれ、そしてこれから世界に開かれていくような、新しい場所を目指します。

小学館とコラボ！ 藝大アートプラザが新装開店

上野キャンパス内の「藝大アートプラザ」は2005年に設立され、大学が企画開発したグッズや教員らが手がけた作品などの販売をしていましたが、耐震改修工事を機に、小学館とタッグを組み、10月にリニューアルしました。

「ここは藝大の出島である」とは、応援隊長のデザイン科・箭内道彦准教授。単なる作品の展示・販売の場を超え、芸術作品を通して、大学と一般の方、企業や地方自治体などを橋渡しするコミュニティ交流ゾーンとして効果的に活用していく予定です。藝大と小学館の



国際藝術リソースセンター 撮影＝野田東徳(雁光舎)

上野の図書館がリニューアル ラーニングコモンズも併設

2018年9月、附属図書館上野本館が改修工事を終え、リニューアルオープンしました。旧館（A棟）の閲覧室は1960年代モダン建築の雰囲気を生かして生まれ変わり、新館（B棟）は「国際藝術リソースセンター（IRCA）」として新設。アイデアソンの宝庫である書庫は大部分が開架として閲覧できるようになり、ラーニングコモンズはグループ学習やワークショップなど自由な発想で使える空間となりました。

皆さんのご利用をお待ちしております。

活躍する教授の研究を本に 藝大出版会の新刊

藝大出版会では新たに2タイトルを出版しました。毛利嘉孝教授らの『アフターミュージッキング―実践する音楽―』は、音楽を変化・生成するものとして捉える「ミュージッキング」の実践書であり、これからの音楽研究を志す人のための必読書。須賀みほ准教授の『日本絵画のエトス』は、誰にでもわかりやすく日本の絵の特質と魅力を伝える一冊です。

本年度も新刊の制作を進めているほか、昨年から展開を始めた書店でのフェアなども企画しています。最新情報は公式ツイッター(@GedaiPress)にて発信しています。



『アフターミュージッキング ―実践する音楽―』

編著：大学院国際芸術創造研究科教授 毛利嘉孝／中村美亜、北條知子、高橋聡太、日高良祐、中野 哲、浅野裕貴、アルニ・クリスチャンソン、平松綱子
2,000円＋税



『日本絵画のエトス』

美術学部芸術学科准教授 須賀みほ
3,700円＋税



カラヤン・アカデミーとの協定で 初めての派遣生が決定

2018年4月、藝大は世界の大学に先駆け、オーストリアの世界的指揮者、ヘルベルト・フォン・カラヤンがベルリン・フィルに設立した「ベルリン・フィルハーモニー・カラヤン・アカデミー」との間で、人材育成に関する協定を締結しました。

これを受けて7月、ベルリン・フィル第1コンサートマスターを務める榎本大進さんが来校し、アカデミー派遣候補者に対して厳正なオーディションを実施。本学卒業生である小川響子さん（Vn）が見事合格し、9月より第1号のアカデミー派遣生となることが決定しました。「実感はまだ湧いてきませんが、ベルリン・フィルという一流奏者たちのもとで精いっぱい学びたいと思っています」と小川さんは抱負を語ってくれました。なお、このオーディションは来年度以降も毎年行う予定です。



左から、榎本大進さん、小川響子さん、澤学長

卒業制作や自画像を保存・修復 未来への遺産に

10月2〜18日、大学美術館で、藝大が長年收藏し続けてきた卒業制作や自画像を通して、保存修復をめぐる問題を考察する『芸術の保存・修復―未来への遺産』展を開催します。

本学は創立以来、学生の卒業制作、自画像などを収集してきました。その数はおよそ1万点に及び、現在でも毎年約140点の作品が大学美術館に新たに收藏され続けています。しかし近年、美術が絵画、彫刻などの伝統的なジャンルを超えて、音楽や映像、身体表現と融合し、さまざまな表現が存在する芸術へと領域を広げる中、新しいメディアを用いた作品が増え、それに伴い、保存や修復の仕方も変わってきました。

本展は社会連携センターによる企画で、伝統的な模写・修理に加えて、新たな複製・復元技術のクローン文化財や、作品の再制作といった視点から、保存修復の未来のあり方を見つめ直します。

美術の授業、どんなですか？ 全国ネットワークでリサーチ

10月2〜21日、全国的美術教育を一望する展覧会を大学美術館で開催します。

「全国美術・教育リサーチプロジェクト」ではアーティストや教育関係者など、美術と教育に関わる人々のネットワークのつながりを全国的に深め、文化芸術の基盤の構築を目指しています。昨年は大学美術館で「子供は誰でも芸術家だ。問題は、大人になっても芸術家でいられるかどうか。パブロ・ピカソ」展を開催。2年目となる今年は「美術の授業」を中心にリサーチします。



昨年の『全国美術・教育リサーチプロジェクト』展より

幼稚園から小中学校、大学まで、どんな美術の授業が行われ、どんな作品が制作されているのか。全国的なリサーチの結果を教育課程の流れに即して紹介します。

大学美術館各館の 展覧会

大学美術館 本館

藝大コレクション展 2018

10月2日～11月11日

芸術の保存・修復—未来への遺産

10月2～18日

幼稚園から大学まで美術教育の流れ
を体感する展覧会—全国美術・教育

リサーチプロジェクト2018—

「美術の授業ってなんだろう？」

10月2～21日



大学美術館 本館

退任記念 深井隆展—7つの物語—

11月1～11日

刻まれた時間—もの語る存在

11月1～11日



深井隆《逃れゆく思念—森羅—》

コミテコルベールアワード2018

—現代における人と自然—

11月17～28日

東京藝術大学大学院美術研究科博士

審査展

12月11～20日

美術教育歴代教員・修了生展 美術

教育の森—美術教育研究室の作家たち

1月8～20日

本郷寛退任記念展—黙示—

1月8～20日



本郷 寛《黙示》

木島隆康退任展—修復の手—

1月8～20日

東京藝術大学卒業・修了作品展

1月28日～2月3日

大学美術館 陳列館

須永剛司退任展

情報のかたち 社会のかたち

デザイン新領域の育て方

10月4～9日

膠と修理「序の舞」を守る—展

10月14～19日

GAP オープンスタジオ@陳列館

10月25日～11月1日

うるしのかたち展 2018

11月6～18日

美しさの新機軸—日本画 過去から未
来へ—展

11月23日～12月2日

東京藝大×NHK 展

12月7～16日

トム・ヘネガン退任展

SPECULATIONS—ideas in

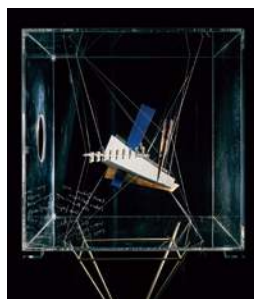
Modern Architecture—(仮称)

1月8～20日

北川原温退任展 太陽と月と地球と

人がつくる円錐形の間

1月8～20日



北川原温《Conic Darkness》
Nakamura Keith Haring Collection Art
Museum (ボンビドゥ・センター所蔵)

東京藝術大学卒業・修了作品展

1月28日～2月3日

第3回国際芸術創造研究科アート・プ

ロデュース専攻キュレーションシヨ

ン領域
2019 展覧会(仮称)

3月下旬～4月上旬(予定)

奏楽堂ほかの演奏会

◎奏楽堂（上野）

- 藝大オペラ定期第64回
10月6日・7日14時（完売）
ピアノシリーズ 2018
GEIDAI meets TOHO
10月8日14時 3000円
藝大プロジェクト 2018 第3回
10月11日19時 2000円
オルガンシリーズ 2018
10月21日16時 2000円
音楽学部附属音楽高等学校 第30回
定期演奏会
11月3日14時
無料 要事前申し込み
藝大フィル定期（第38回）
11月9日19時 3000円
うたシリーズ 2018
11月10日14時 2000円
藝大フィル合唱定期（第389回）
11月17日15時 3000円
弦楽シリーズ 2018
11月18日15時 2000円

邦楽定期第85回

11月21日18時 2000円

シンフォニーオーケ定期第58回

11月23日15時 1500円



シンフォニーオーケ定期第57回の様子

ウィンドオーケ定期第86回

11月25日14時

一般 1500円

高校生以下 500円

藝大アーツ・スペシャル 2018

〜障がいとアーツ

12月1日（ワークショップ…定員30名）14時受付開始、12月2日（コンサート）14時 入場無料

藝大室内楽定期第45回

2月2日・3日14時 1500円

チェンバーオーケ定期第32回

2月11日15時 1500円

モーニング・コンサート第12回

2月14日11時 1000円

モーニング・コンサート第13回

2月21日11時 1000円

松下功退任記念コンサート

3月17日15時

大石泰退任記念演奏会

3月20日15時

檜山哲彦退任記念レクチャー&コンサート

3月21日15時

第13回奏楽堂企画学内公募演奏会

3月29日時間未定

◎ほかの会場

関根知孝退任記念演奏会

第4ホール（上野）

3月24日14時

西岡龍彦退任記念コンサート

千住キャンパス、スタジオA・B、第7ホール

3月30日15時

＊展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト（<http://www.geidai.ac.jp/>）をご覧ください。

＊展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学 大学美術館

☎03-5777-8600（ハローダイヤル）

＊演奏会についてのお問い合わせ

東京藝術大学 演奏芸術センター

☎050-5525-2300

＊演奏会チケットの取り扱い

東京芸術大学 生活協同組合（店頭販売のみ）

☎03-3828-5669

ヴォートル・チケットセンター

☎03-5355-1280

チケットぴあ

☎0570-02-9999

東京文化会館 チケットサービス

☎03-5685-0650

イープラス

<http://eplus.jp/>

○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金(藝大基金)へ温かいご支援を賜りました皆様に、深謝申し上げます。

本号では、2018年2月から2018年6月までに寄附の申し込みをされた皆様を

掲載させていただきます(掲載をご承諾された方のみ)。

[個人の皆様]

宗次徳二様 2600万円

後藤幹子様 500万円

上野昌也様 300万円

上野俊子様 100万円

たかくさわこ様 100万円

浅井智子様 31万円

佐橋俊彦様 30万円

篠田元子様 30万円

山下正明様 10万円

佐藤真様 5万円

杉村佳代子様 5万円

本多宏子様 5万円

伊良波範子様 3万円

岡部生様 3万円

玉置雄三様 3万円

中谷茂次様 3万円

李有仙様 3万円

安井君子様 2万円

阿部博子様 1万円

新井繁男様 1万円

磯貝紀枝様 1万円

岡本達三様 1万円

加藤久恵様 1万円

木村一也様 1万円

楠瀬亮様 1万円

窪田雅章様 1万円

小林市子様 1万円

近藤弘様 1万円

佐藤好邦様 1万円

杉野森創様 1万円

鈴木一美様 1万円

鈴木俊雄様 1万円

高橋敏幸様 1万円

高橋榮子様 1万円

千葉一彦様 1万円

仲川信正様 1万円

中澤光啓様 1万円

中村篤様 1万円

庭野實様 1万円

野口和義様 1万円

長谷川信久様 1万円

羽鳥健司様 1万円

林悦子様 1万円

藤墳昌弘様 1万円

細谷和夫様 1万円

堀博之様 1万円

本多佐保美様 1万円

本多正和様 1万円

村上徳子様 1万円

門田伸一様 1万円

矢田藤子様 1万円

山田安孝様 1万円

吉田幸広様 1万円

渡部鉦之様 1万円

本島仁子様 5000円

河野里香様 3000円

牛田尚様 2000円

伊澤悠様

石樽宏成様

伊藤いつみ様

伊藤信夫様

稲塚美代子様

内田正巳様

大澤美恵子様

大和田紀代美様

河西寿子様

神出計様

桑村毅様

小島綱夫様

後藤博美様

齋藤榮子様

坂口棕治朗様

笹山浩一様

佐野美登里様

鈴木誠様

澄川喜一様

田村哲子様

中井恵美子様

長浦武史様

野島敬久様

端地則仁様

塙佐和子様

早川圭子様

樋口泰子様

平岩共代様

古川秀子様

松本文様

三好克美様

森智子様

大和毅一様

山本正壽様

弓削尚徳様

渡辺早苗様

[法人の皆様]

株式会社ミロク情報サービス様 1000万円

山田産業株式会社様 200万円

上野製薬株式会社様 100万円

藝大48実行委員会様 100万円

国際ソロプチミスト奈良-まほろば様 100万円

公益財団法人松尾学術振興財団 理事長 宅間慶子様 100万円

エスワンファイブ株式会社様 5万円

キングレコード株式会社様

一般財団法人若林暢音楽財団様

○マスターズ基金のお願い

藝大基金では事業を指定したご寄附も受け賜っており、さまざまなプロジェクト基金を設けておりますが、この度、藝大を退任する常勤教員たちによる記念展覧会・演奏会を応援するための「藝大マスターズ基金」を立ち上げました。これらの展覧会・演奏会は、各教員のこれまでのアーティスト活動、教育研究活動の軌跡と成果が集約された玄奥な趣あるものです。皆様のご理解・ご協力を切にお願い致します。

☎お問い合わせ

藝大基金事務局 ☎ 050-5525-2400

藝大基金ウェブサイト <http://fund.geidai.ac.jp/>

☎編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8 東京藝術大学内 『藝える』編集部

Fax : 03-5685-7761 E-mail : toiawase@ml.geidai.ac.jp

東京藝術大学広報誌 『藝える』第3号

発行日
2018年9月30日

編集・発行
東京藝術大学『藝える』編集部

編集長
藤崎圭一郎

アートディレクション
有山達也

デザイン
中本ちはる(アリアマデザインストア)

写真
富田里美
(表紙、P1~21、P24~27、P34~35)

校閲
西村 knack 雅彦

編集
小林沙友里

事務局
東京藝術大学社会連携課

印刷
シナノブリッシングプレス